友の会主催　解説・鑑賞会
「田中信太郎 ― 意味から遠く離れて」展
解説：野田尚稔 学芸員

5月10日(日)　参加者63名

this is it! what is it?

米原久介

田中信太郎とはどのような作家なのだろう？ 同じく世田谷の清川泰次が思い浮かぶ。多彩な才能を活かし作品を残し、戦災、ネオ・ダダイズム、ミニマリズムと変革期それぞれの社会のムーブメントや美術が流れていた時代をまさに感じ取るのにピッタリの人物が近くにもうひとりいたとは。無駄が削ぎ落とされ洗練されている。

レクチャーを聞き、生い立ちや作品創作の流れを知ると彼がより大きな真理を求め、近づこうとしていたその姿が思い浮かび始めた。これの応えはこれか！ それはそれか！

晩年の絵画を観るとまた渾沌としてくる。ヘリオトロープ。真理はさらに自然界・宇宙へ広がったのだろうか？ 歴史と現代と未来の多くを考えさせていただきました。



そしてこの「器」がとても素晴らしい。インスタレーションが砧の緑に溶け込んでいくようなホール。光り輝く多くの作品に合わせ、シンプルでかつ多彩な空間をいかした展示が行われている。この場所は、このまま生き続けてほしい。そんな思いをまた感じることが出来、とても良い体験となりました。ありがとうございました。

友の会主催　解説・鑑賞会
ミュージアム コレクションⅠ
「武蔵野・再考 ― 写真家たちの武蔵野と向井潤吉の写真」
解説：矢野進 学芸員、向井真理 学芸員

6月10日(水)　参加者27名

武蔵野を愉しむ

先ず矢野進学芸員の解説で、世田谷美術館には、東京を撮影した写真がかなりあり、武蔵野をテーマにした師岡宏次、田沼武能、島田謹介といった写真家たちの作品もたくさん収蔵されていて、そこから写真展の構想が浮かんだそうです。さらに画家の向井潤吉が遺した膨大な写真の中から写真家金村修が選んだものと金村修自身の現代の武蔵野の写真作品を加えて、今回の「武蔵野・再考」ができあがったとのこと。

続いて向井真理学芸員から展示の5人の作家をはじめ興味尽きない内容の解説があり展覧会の面白さが飛躍的に増しました。例えば金村修氏が写真を軽快に肯定的に選ぶ様子や「向井潤吉の写真はウジェーヌ・アジェだ」との発言、国木田独歩に関連するエピソード、本展示には未陳作家の大倉舜二や漫画家斉藤潤一郎の紹介等々、盛り沢山でした。

最後に友の会との共催イベント「アート散歩」(6月17日実施)で行く角川武蔵野ミュージアムの見どころ、食事処まで解説していただきました。

とにかく見やすい写真を駆使した分かりやすく面白い解説、両学芸員、本当にありがとうございました。武蔵野、最高です！

(友の会広報部)



第41回　世田谷美術館・世田谷美術館友の会共催
アート散歩特別編
ミュージアム コレクション展「武蔵野・再考」連動企画
角川武蔵野ミュージアム

6月17日(水)　参加者29名　同行者 矢野進 学芸員、向井真理 学芸員

角川武蔵野ミュージアム

石井美智子

トトロの森ならぬ林を通りぬけると、梅雨の晴れ間の青空に巨大な建物が。隈研吾監修のその建物はまわりに2万枚の花崗岩をはりめぐらせ、地層から巨大な岩がもちあがったイメージとのこと。

2階の広いロビーは黒い壁で、「戦争はイヤだ」と大きくかかれた横には創始者、角川源義の角川文庫発刊に際しての言葉が。





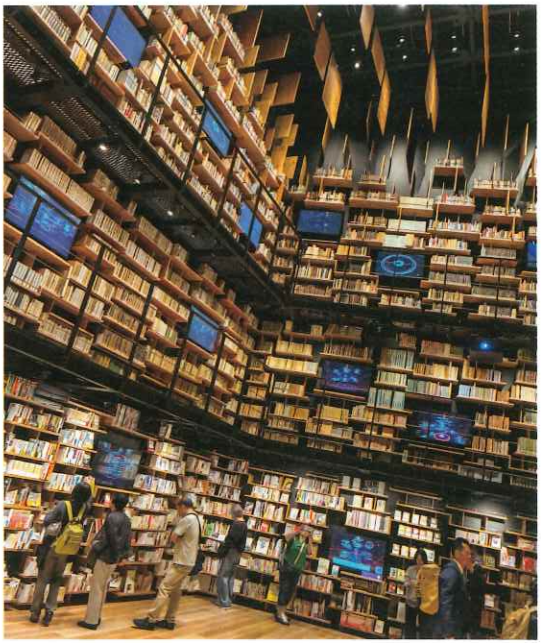
角川武蔵野ミュージアム 藤原みなみ学芸員のお話

エレベーターで5階に上がると明るい展望が開かれ、武蔵野ギャラリーに着く。角川武蔵野ミュージアムと世田谷美術館の両学芸員さんから7つ(新田開発、雑木林、川、ハケ、郊外、旅、移民)のキーポイントをふまえて武蔵野の話をきく。まさに、世田美の収蔵品展「武蔵野・再考」だ。

そこからは自由見学で、私達はあの有名な本棚劇場、荒俣ワンダー秘宝館、博物画を楽しんだ。映像もたけている角川なので、随所に照明や展示に工夫がみられ私達をあきさせない。

太麺の武蔵野うどんをシメに食し、武蔵野台地の強風に日傘をとばされないように、貨物列車「桃太郎」も走る武蔵野線で帰路についた。

本棚劇場



世田谷美術館・友の会共催　解説・鑑賞会
「ふたりのアフリカ、手仕事の宇宙 ―人類学者・川田順造と陶芸作家・小川待子のコレクション」展
解説：塚田美紀 学芸員

8月1日(土)　参加者90名

違和感を吹き飛ばした学芸員の解説

齊藤憲祐

今回の世田谷美術館の展示品は、川田順造と小川待子夫婦が現地で入手した瓢箪製の食器、草で編んだ籠、布、仮面、革製品などのアフリカの民芸品と川田順造が撮った写真と小川待子の作品である。ほとんどの展示品を創作したのは、川田順造と小川待子夫婦ではなく、アフリカの住民である。美術館の展示品は、絵画や彫刻という固定概念があるために、少し違和感があった。これが、塚田美紀学芸員による解説を聞くまでの私の状況でした。

塚田美紀学芸員から今回の展示会が開催された経緯と苦労話と小川待子との出会いを教えていただけたのは、違和感を吹き飛ばすのには、十分なパワーがありました。展示品の基礎データとして、展示品全ての縦・横・高さを計測されたこと、川田順造の書籍を道標にしながら、各展示室のテーマを決めたことが知れて良かったです。



今回の解説を思い出しながら、展示会をじっくり見たいです。それに、川田順造の書籍を読んでみたいと考えています。

友の会主催 解説・鑑賞会
ミュージアム コレクションⅡ
「気になる、こんどの収蔵品 ― 作品がつれてきた物語」
解説：向井真理 学芸員

8月19日(水)　参加者31名

作品には物語がある

会場には、版画、油彩画、日本画、彫刻等々、実に多彩な作品が展示されていました。向井真理学芸員の解説をお聞きして、それぞれの作品に物語があることを知ることができました。展示されているのは、2020年から2025年にかけて世田谷美術館に収蔵された作品です。池田満寿夫の作品をはじめとして展示数118点にも及びます。

作品がどうやって生まれ、作家から誰に渡り、どういう経緯で世田谷美術館に収蔵されたのか。それは、世田谷に縁のある作家たちの物語であり、作家たちの繋がりの物語であり、時間を越えた作品の物語でもあります。

特に、フランスのセレ近代美術館の館長もつとめた、ピエール・ブリューヌの油彩画の話は印象的でした。彼の初期作品の多くは火災で消失したため、画家・伊原宇三郎が戦前に日本に持ち帰っていた作品は貴重なものとなったそうです。寄贈されたその作品に関して、今回の展示の準備でセレ近代美術館に照会すると先方も大変驚き喜ばれていたというエピソードは、とてもドラマチックでした。



世田谷美術館だからこそ集まってきた作品たち、普段であれば同時に展示されることのない作品たち、その物語の共鳴には心を動かされました。

(友の会広報部)

水墨画講座
講師：佐藤良助

5月13日～29日(水、金)全6回　参加者20名

水と墨の世界との出会い

花房隆夫

日常的に絵画を描く習慣がないまま、世田谷美術館の美大を修了したのち、何を中心に描こうかと考えていた時に、友の会の水墨画講座があることを知り参加しました。そのきっかけは、伊藤若冲、円山応挙、長澤蘆雪、神坂雪佳が好きで、その絵に慣れ親しんでいたこともあると思います。

講座に参加することになり、用具の準備をしたところ、それが20品目近くになり、名前だけでは何の用具かわからないものもあり、まずは世界堂の店員の方に一つ一つ相談しながら購入した次第です。いざ講座に参加すると、ほとんどの生徒さんは、先生から渡される練習絵を模写するだけではなく、自分の独自の絵を素人とは思えないレベルで描いており、驚嘆しました。

私は、と言えば、小中学校以来、墨を磨ったこともないレベルでしたが、先生、スタッフの方、参加者のご指導、アドバイスもあり、水墨画らしきもの(自己判断ですが！)が段々と出来てきました。ひとつ学んだことというと、水と墨のバランスを筆でコントロールすることが如何に難しいかということを認識したことが、講座参加の成果かと思います。

なお、講座の参加者は全員、最低一品作品展に出品しなければいけないという決まりらしいのですが、先生の優しいお心で、最終日の品評会で見て頂いた作品を出せることになりました！しかし、作品展は、まだ先なので、練習を積み、別の作品を描くことが当面の課題と認識しています!!



銅版画講座
講師：浦辺佳奈枝

6月12日(金)～7月17日(金)全6回　参加者15名

試してみる楽しさ

小笠原浩子

銅版画との出会いは世田谷美術館美術大学です。用語は難しく、刷り上がりと銅板が反転関係なのもややこしいが、楽しい！そんな銅版画がまたできるとは。友の会の銅版画講座に感謝しています。

浦辺先生の銅版画講座は、初心者には初歩から丁寧に、そして経験者にはそれぞれのやりたいことに添ったアドバイスが受けられます。先輩方はすでに独自のテーマ・スタイルができていることに驚き、羨ましく思いました。「すごい！」「どうやったの？」と声が上がる度、駆け寄って教えていただきました。

2度目の受講となる今年、私は人物画に挑戦。結果は「難しい」の一言。それでも新たな試みができたのは前向きな空気があふれている教室だからです。一つの版に数年にわたり向き合い続けている方、メゾチントの光の表現を追求している方。お正月にむけた壮大な版画や魅力的な顔の版画。色インクを試せるのも魅力の一つ。白インクだけの刷りにも驚きました。先生の寛容かつ的確なご指導のもと、受講者一人一人の試みが交差し刺激しあって、楽しい作品がぽんぽんと生れています。銅版画講座ちょっと覗いてみませんか。



友の会主催　第65回　春の美術館めぐり（日帰り）
静岡県立美術館、静岡近代美術館

6月5日（金）参加者45名　同行者 吉田絵美 学芸員

楽しかった美術館めぐり

坂東まゆみ

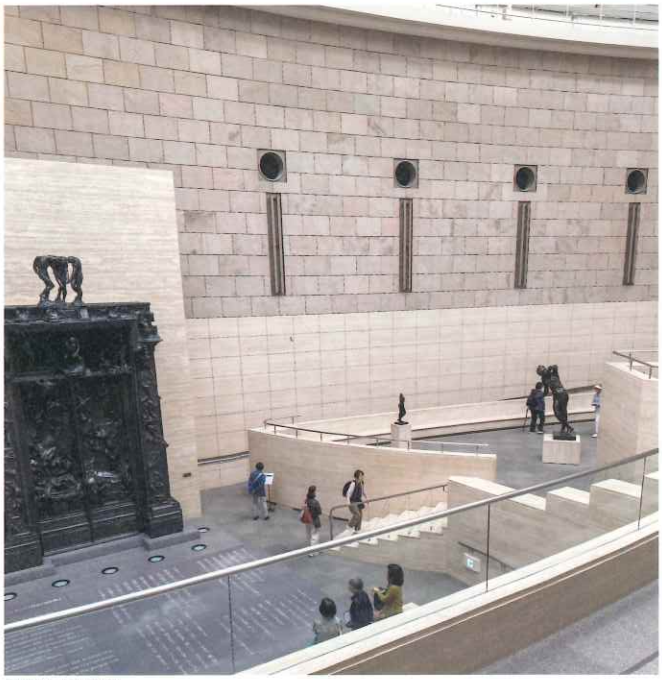
曇りながら穏やかな6月の朝、友の会のバスは静岡に向って出発です。清水のドライブインに到着。おさしみ定食の昼食です。残念ながら、富士山、顔を出してくれません。

静岡県立美術館に向いました。遺跡から出土した、生きた馬の代わりに奉納した絵馬のお出迎えです。進むと伊藤若冲の桝目描きの鳥獣図、高低差をつけて立体を表現。すご過ぎます。人形の部屋を経て、広〜い部屋に、ロダンの彫刻、圧巻です。その後、このロダンの部屋をテレビ番組で見ました（NHK Eテレ「ねこのめ美じゅつかん」6/13　11:30 放送）。考える人は考えていない。地獄の門で人々の運命を見下ろしている。え!?　考えていない？

静岡近代美術館に向いました。徳川慶喜公ゆかりの地に、もっと美術品をとの思いで、大村明さんによって開設されました。黒田清輝、熊谷守一…富士の作品が目につきます。コロー、シャガール、セザンヌ…素敵な作品が並びます。大村さんから図録二冊頂きました。大村さんの静岡愛、美術愛を感じます。いろいろな作品に接する事が出来、幸せな時間でした。とても、楽しかったです。

学芸員さん、世話人の皆様、本当にありがとうございました。





静岡県立美術館



静岡近代美術館

思い出の美術館

東京都美術館旧館

飯泉善一郎

先日、高等学校同窓のＫ君から東光展の招待券をいただき、早速、上野の東京都美術館へでかけ、入選作の彼の静物画を観てまいりました。彼は趣味で油彩画を描き続けており、数年間にわたり入選を続けております。

今回の展覧会場は、昭和50年に開館した東京都美術館新館でしたが、かなり以前に上野へ東光展を観に行った記憶がありましたので、古いアルバムで調べたところ昭和45年に撮影した写真が見つかり、背景から東京都美術館旧館であったと判明いたしました。

東京都美術館旧館へは、水彩画や油彩画を熱心に描いていた関係から、毎年6月に開催の日本水彩展と毎年11月に開催の日展に通い続けていたことを懐しく思い出しました。特に正面階段を上ったところに並ぶ円柱、鑑賞後の食堂での寛ぎ、地下の画材店でのキャンバスの購入など往時の光景が甦ってまいりました。

昭和45年に東光展へでかけたときの東京都美術館旧館前の広場での写真から次の俳句が生まれました。

「馬肥ゆる他人のやうな古写真」

なお今年、東京都美術館は開館100年を迎えました。



訂正とお詫び

NEWS LETTER 131号5ページ油彩講座の寄稿執筆者は中山和俊（ナカヤマ カズトシ）さんでした。中村と誤記したことをお詫びし、訂正します。

これからの事業について

◎会員作品展　　11月18日（水）〜22日（日）
◎美術館めぐり　　12月1日（火）
◎油彩講座　　1月15日〜3月5日（金）全8回
◎解説・鑑賞会　　企画展・ミュージアム コレクション展ごとに予定

※2026年度の各事業につきましては実施の詳細が決まり次第、会員の皆様にチラシや友の会ホームページ等でお知らせいたします。